舞鶴城の歴史

甲府城絵図(柳沢文庫保存会所蔵『楽只堂年録』より)

舞鶴城(県指定史跡甲府城跡)は、古くは甲斐府中城、一条小山城、赤甲城などとも呼ばれていました。天正10年(1582)甲斐国は戦国大名武田氏の滅亡後、まず織田信長の領国となり、本能寺の変の後は徳川家康の支配することとなりました。しかし、豊臣秀吉が天下統一をなしとげると、秀吉の命令により甥の羽柴秀勝、腹心の部下である加藤光泰らによって築城が始められ、浅野長政・幸長父子によって完成をみました。また、慶長5年(1600)関ヶ原の戦いの以降は再び徳川の城となり、幕末まで存続しました。

舞鶴城は江戸時代の初めは、将軍家一門が城主となる特別な城でしたが、宝永元年(1704)時の城主徳川綱豊が第5代将軍徳川綱吉の養嗣子となり江戸城西の丸へ移ると、このあとに柳沢吉保が城主となり、大名の城として最も整備され、城下町とともに大きく発展しました。しかし、柳沢氏が大和郡山城主として転封された後は、甲斐国は幕府の直轄地となり、舞鶴城は甲府勤番の支配下におかれました。しかしその間、享保年間の大火により本丸御殿や鍛冶門を焼失するなど、次第にその往時な姿は失われていきました。

明治時代になると、舞鶴城も廃城となり、明治10年前後には城内の主要な建物はほとんどが取り壊されました。まず内城全体が勧業試験場として利用されはじめ、さらに翌年鍛冶曲輪に醸菊酒醸造所が設置されるなど、城郭としての機能は失っていきました。また、現在の山梨県庁が旧楽屋曲輪内に設けられ、中央線敷設に伴い屋形曲輪、清水曲輪が解体されるなど、さらに城郭が縮小され、現在では内城の部分のみが城跡としての景観を保っています。

公園としての歩み

以上のように舞鶴城は明治に入り、徳川時代の面影を大輪に失うこととなり、残された城跡が明治37年(1904)に「舞鶴公園」として解放されました。

県借用地であった舞鶴公園は、大正6年(1917)に正式に払い下げを受け県有地となりました。昭和5年(1930)には、甲府中学校の移転に伴い、旧追手役所跡にあった県庁舎や県会議事堂が楽屋曲輪跡に移り、同時にその西側、南側の堀は完全に埋められました。その後、武徳殿(昭和8年)、恩賜林記念館(昭和28年)、県民会館(昭和32年)及び議員会館(昭和41年)などが公園内に設置されました。

このような中、甲府市が戦後の荒廃した市街地の復興に併せて公園整備を進め、昭和39年(1964)には、甲府市の申請に基づき都市公園「舞鶴城公園」として都市計画決定され、以後広く県民の利用が促進されました。

また、昭和42年(1967)に県文化財調査委員会で甲府城跡の荒廃が議論され、同年7月に県教育委員会により「甲府城跡総合調査」が実施され、翌昭和43年12月に舞鶴城公園区域は県指定史跡「甲府城跡」として告示されました。

このような中、昭和60年代に入り、公園の改修を求める県民の要望が高まってきたことを受け、県として整備手法を検討した結果、県指定史跡では文化庁の史跡整備事業の導入が不可能なことから、都市公園事業として舞鶴城公園の再整備を行うことを決定しました。

そこで土木部は、整備計画を策定するに当たり、昭和62年度から平成元年度にかけ、文化財関係者を含む「舞鶴城公園再整備検討委員会」を設置し、舞鶴城公園整備計画を策定しました。なお、事業実施に当たっては文化財関係学識経験者で構成され、教育委員会が設置した「甲府城跡調査検討委員会」に整備計画を諮りながら行ってきました。

公園概要

公園面積	6.2ha(住区基幹地区公園)	
経　過	昭和39年10月	都市公園として都市計画決定(面積 5.5ha)
	昭和43年12月	県指定文化財(史跡 名称甲府城跡)
	平成 4 年 1 月	都市計画決定の変更(6.0ha)
	平成12年 2 月	都市計画決定の変更(6.2ha)

舞鶴城公園の由来

江戸時代の甲府城は「甲斐府中城」と呼ばれていました。このほかに一条小山城(鎌倉時代に一条氏の居館のあった小山)や赤甲城などの別称があります。舞鶴城とは江戸時代の後半頃に白壁が重なりあう優雅な姿から、鶴が舞う雄大な姿を連想してつけられたものと考えられます。現在は約6ヘクタールが都市公園と県指定史跡となっていますが、かつては20ヘクタールほどの広大な城郭でした。

石垣解体新書 稲荷櫓台石垣

舞鶴城公園では、主に壊れた石垣や傷みの激しい石垣などの改修工事を進めています。石垣は造られた時代ごとに使う石材の加工や積み方が変化します。舞鶴城公園の石垣も築城期の約400年前に自然石を使った野面積みから始まり、切石積みへと変化しています。

石垣情報

積まれた時代：1590年代頃
石垣の高さ：約14m
積み方の種類：野面石(自然石)の乱積み
石の種類：安山岩
破損状況：東・北面石垣約1100石中45%以上が破損

写真の丸いものは「輪宝」といって江戸時代に稲荷櫓を建築するときに使われた地鎮具の一つです。櫓が無事完成するようにとの昔の人たちの思いが伝わります。

解体調査しながら一石ずつ観察すると見えないところで想像以上に破損していることが判明しました。積んだときのバランスや裏の構造などが原因と分かりました。

石垣は石材だけではなく裏栗石や盛土の三つの要素でできています。その他に石垣表面の目地に入れる詰石や石材を後ろで支える鬱石もあります。

野面石を積むとき大事なのは、無理な石の置き方をせず、隅り合う石材と胴(表面の少し内側)で接するということです。石は機械で吊り、一石ずつ慎重に積み上げます。

裏栗石もしっかり詰めないと石垣が歪んでしまうので、丹念に手と機械で詰めていきます。盛土は改良材を入れて機械で転圧します。材料はすべて再利用しています。

使える石材は可能な限り元の位置へ、割れて使えない石材は裏栗石などにして再利用しました。赤の線は改修した範囲です。

甲府城跡古写真館

県内外で、幕末から明治時代に撮影された甲府城跡の写真を発見しました。当時のお城の姿や建物の様子を知るとても重要なものです。(提供:石黒コレクション保存会)

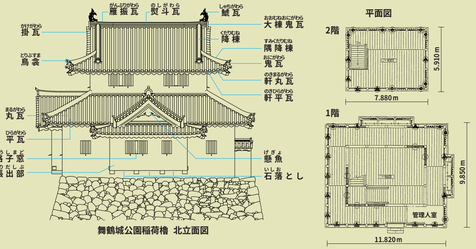
現在のスクランブル交差点付近にあった甲府城の追手門(幕末～明治時代初め)

甲府城跡より南側市街地を望む(明治時代初め)

櫓の概要

稲荷櫓の形状や構造は絵図・古文書・古写真・発掘調査成果等を基に検討し、江戸時代初期、寛文4年(1664)の建築当初の姿で建てました。

■規模
二重二階屋根
木造 入母屋造 本瓦葺
高さ：10.865m
一階：桁行6間 梁間5間 123㎡
二階：桁行4間 梁間3間 46㎡



舞鶴城公園稲荷櫓 北立面図

櫓ができるまでの工程

慎重に木材を選んでいる様子

復元作業中の櫓

左官工の様子

稲荷櫓完成

復元作業中の屋根瓦(覆屋の中)

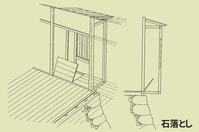
復元された鯱瓦

矢狭間と鉄砲狭間

塀の壁に小さな穴を開けて城外をのぞき、弓矢や鉄砲で敵に攻撃を仕掛けたりするためのものです。形は様々ありますが、一般的には長方形・正方形は矢狭間、円形・三角形は鉄砲狭間とされています。これはそれぞれ武器を動かす際の視野の違いによるものです。

石落とし

建物の内側から石を落として敵を攻撃するためのものです。稲荷櫓では出格子窓の床に設けています。



伝統技術

今回、石垣改修工事・稲荷櫓復元では様々な伝統技術を使い、また、見学会を開催し公開してきました。その一部を紹介致します。

石積

今から約400年前。何トンもある石をどのように「割り、運び、積み上げた」のでしょうか。

石を割るには、割りたい部分に沿って「矢穴」という四角い穴を「ノミ」を使い掘り込み、そこに鉄製の「矢」を入れ、「はりまわし」などと呼ばれるハンマーで叩き入れ、裂くように割ります。

石を見り上げるのは、現在のウインチにあたる「かぐらさん」を使っています。二つ又を組んで、石に綱をかけ、かぐらさんで巻いていくと、二つ又に取り付けられた滑車に吊られた石が持ち上がります。

石引き実演の様子

かぐらさんによる石積の再現

建築

高さが11mのこの櫓には、多くの山梨県内産の木材が使われています。防虫性が高い広葉樹である栗は土台、加工しやすく美しい木肌の檜は柱や壁、頑丈な松の木は梁、とそれぞれが特性に合わせて使われています。また、この木材の加工では、手斧と呼ばれる昔ながらの斧を使いました。

軽くて丈夫であるという特性を活かし、乾燥収縮による木材の変形に対応させるためには、木組みの技術も欠かせないものです。稲荷櫓では「継ぎ手」「仕口」といった木組みをそれぞれの箇所に応じて使っています。

手斧の実演の様子

左官

壁は土にワラを混ぜ込ませ、寝かせては混ぜるを繰り返し土を腐らせ、粘り気のある壁土を作ります。それをまず柱の貫の間に竹を密に固定し、わら縄をぐるくる巻きにして骨組みとなる小舞揚きをします。そして荒壁塗り、斑直し、中塗り、上塗りというように段々と細かい土を塗っていきます。当時、敵の攻撃や火災を防ためにに壁を厚くしていったと思われます。そして、最終段階では海藻の煮汁を糊代わりとして、貝灰や石灰で漆喰を塗り仕上げています。

土壁塗り体験の様子

瓦葺き

瓦屋根では、複雑な屋根に瓦を設置するための設計図「瓦割り図」を描き、次に出土品をもとに瓦を復元製作していきます。また瓦を乗せる下準備として、野地板葺きといって薄い板を何層も竹釘で打ち付けます。この時、竹釘を「トントン」と音を立てながら打ち付けるので「トントン葺き」とも言われています。この上に瓦受けの桟を付け、さらに葺き土を置きます。そして瓦を乗せ、数枚ごとに銅線でしばり付け固定していきます。

野地板葺き体験の様子